福井県文書館企画展示

# すごろく展

平成21年 **11月27日(金)** ▶ 平成22年 **1月27日(水)**

〈開館時間〉9：00～17：00　入館無料

福井県文書館　FUKUI PREFECTURAL ARCHIVES

# ふくいの実業家すごろく

福井県下の商店や会社203か所を絵入りで紹介したすごろくです（４～５ページ）。県内で刊行されていた新聞❶『北陸朝報』の1904年（明治37）元日の付録でした。

この時期、 県下は嶺北地方を中心に輸出向け羽二重織物の全国有数の産地であり、 羽二重は生糸・綿糸につぐ日本の外貨獲得商品でした。

輸出向け羽二重は、福井市内の機業家たちが1887年（明治20）に先進地の桐生から技術者を招いて織り方を学び、その技術は鯖江・武生・粟田部などの市街地のみならず農村部へとひろがりました。そして、このすごろくが出版された前年の1903年には、先進地だった群馬・京都をしのいで全国第１位（府県別絹織物生産額）に躍進していました。

まず、すごろくから輸出向け羽二重に関連する商店や会社をあげるならば、 ❷メーソン商会とローゼンソール商会。いずれもニューヨークに本店をもつ絹織物専門の外国商館で、 明治20年代なかばには相次いで福井市に出店しました。メーソン商会から独立して主要な絹織物輸出商となった堀越商会。さらに地元の生糸商・呉服商が羽二重商にも経営拡大していった❸松島商店・黒田与八商店・❹西野商会。製織直後の羽二重から糊や不純物を取り除いて商品化するために不可欠な「精練（せいれん）」を行っていた❺黒川練工場・伊藤練工場なども目をひきます。

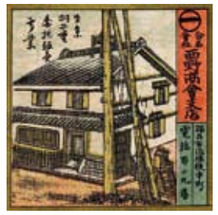
また、横浜をはじめ全国各地から入ってくる原料生糸に付けられた荷為替（にがわせ）手形を取りあつかい、 資金を融通した銀行の役割も重要でした。生糸商の活発な活動を支えた銀行は、1900年（明治33）の恐慌までは❻九十二銀行・大和田銀行といった地元の銀行が中心でしたが、これ以降、大阪に本店を置く❼百三十銀行などの支店にとってかわっていました。

生糸や羽二重の輸送に鉄道（1896年敦賀・福井間開通）が大きな役割を果たしたのはいうまでもありません。

❷ メーソン商会

**万司大岡商店**
「羽二重市場」の看板と店内の畳敷に会合する人物や反物が描かれています。機業家が共同で定期的に仲買人を集め、羽二重を入札・買い取らせていたと推測されます。

❸ 松島商店



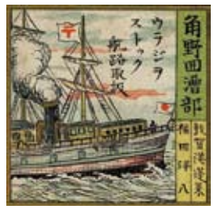
❹ 西野商会
のちに人絹取引所等の創設にもかかわる西野藤助が経営。

❺ 黒川練工場　京都出身の技術者黒川栄次郎による精練工場。現在のセーレン㈱の前身。

❻ 九十二銀行

❼ 百三十銀行





❽ 角野回漕部

❶ 北陸朝報
「世界の羽二重主産地たる福井市」の信頼できる新聞であることをうたっています。

地域的にみると、 ７割が福井市内の商店・会社ですが、 ついで多いのが敦賀です。敦賀は、1899年（明治32）に新潟・伏木（ふしき）・七尾港などとともに外国貿易港に指定され、 建設中のシベリア鉄道を経由してヨーロッパと連絡する国際貿易港として発展が期待されていました。

すごろくには、 敦賀港振興に尽力した大和田荘七（そうしち）が創設した大和田銀行、 菜種やアマなどを圧搾した大和田製油部、 ウラジオストック航路を取りあつかう❽角野回漕部（かどのかいそうぶ）、 金ケ崎駅前の大黒屋（敦賀ホテル）などが載っています。

参考文献：『横浜市史』第４巻上1965年、『福井県の歴史』2000年

## 下絵は、あの菱川師福（ひしかわもろよし）?!

すごろくの予告　『北陸朝報』1903年11月13日　橋本茂兵衛家文書　C0033-00021

現在確認されている『北陸朝報』は、わずかに2日分のみですが、幸いなことに、そのなかにすごろくの予告記事がありました。

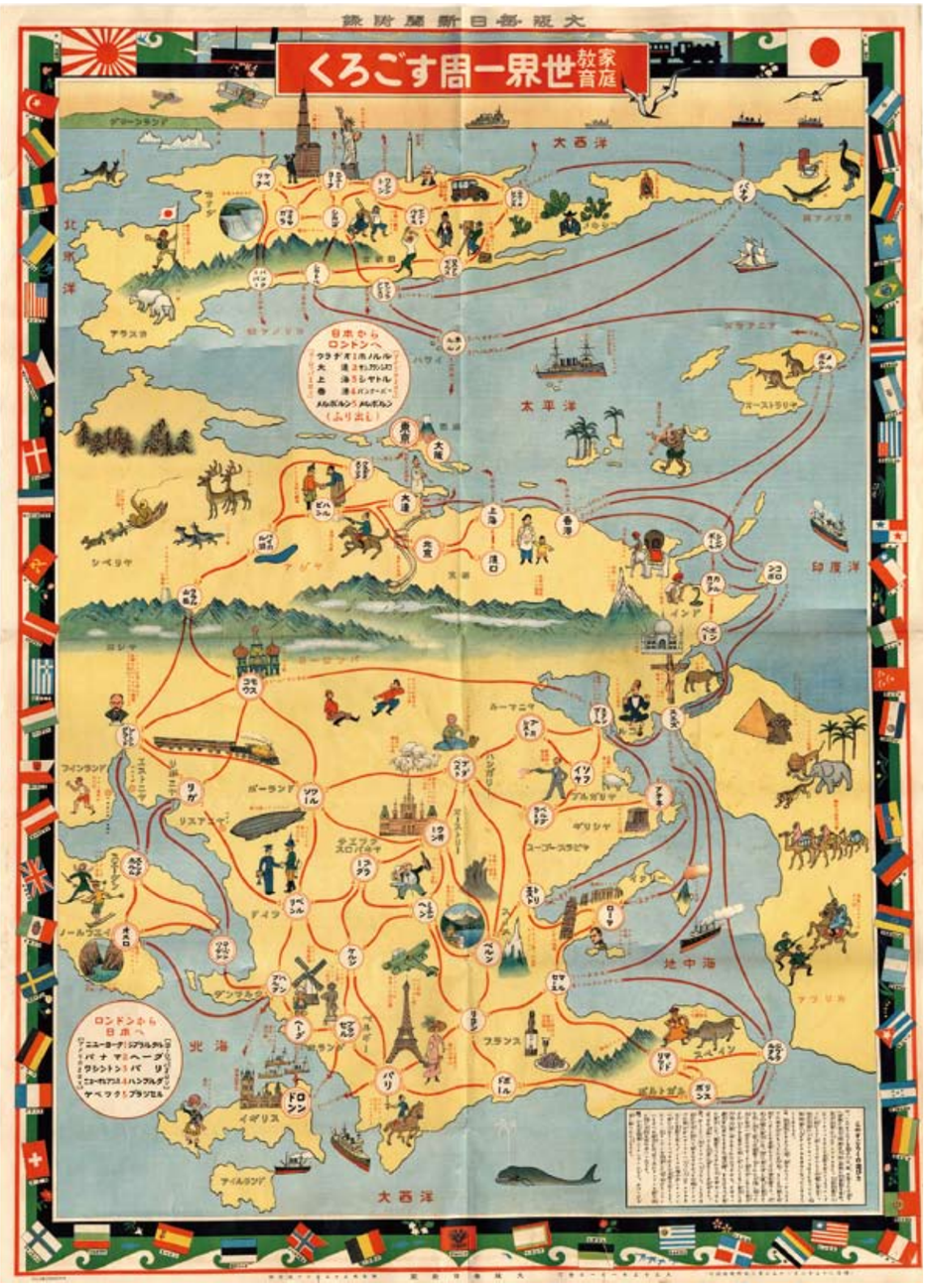
この記事によれば、 紙面2枚大の光沢紙に石版5度刷で印刷し、 下絵は菱川師福（ひしかわもろよし）*（1845-1941）に依頼する予定であり、掲載料は2寸（約6cm）四方で10円、デザインは希望に応じるとされています。「愛読諸君の喝采（かっさい）を博する丈（だけ）の成算（見通し）既（すで）に定まり居れる」「斯（かか）る最良の広告を冷眼に看過せらるゝ実業家は二十世紀の実業家たる資格無き者也」と言い放っています。

申込所に名を連ねた毛利政八郎は、 すごろく左下欄外の企画者３人のうちの１人であり、 福井市佐佳枝下町の毛利薬舗の縁者と思われます。企画者のうち大村百蔵（紀山）は、『北陸朝報』の主筆でした。

＊「馬威図屏風」などで知られる福井市在住の絵師。

「福井県実業家案内すご録」　1904年（明治37）1月1日『北陸朝報』第565号付録　坪田仁兵衛家文書（当館寄託）　C0005-01237

# すごろく紹介




「家庭教育　世界一周すごろく」　1926年（大正15）　坪田仁兵衛家文書（当館寄託）　C0005-01234

『大阪毎日新聞』の元日の付録。日本をふりだしに、 北アメリカやヨーロッパを経由してロンドンに向かい、 その後、 再び日本に帰ってきます。世界各国の都市をまわりながら、 歴史や文化を学ぶことができる構成になっており、まわりにならぶ国旗も見る人を楽しませてくれます。

「少年歴史地理双六（すごろく）」　1910年（明治43）　坪田仁兵衛家文書（当館寄託）　C0005-01221

『少年世界』新年号付録。ふりだしは東京で、鉄道唱歌の一節が書かれ、宮城（皇居）があがりとなっています。途中には当時の歴史・地理の教科書にみられる地名と事件（主として戦い）、 関連する人物が描かれており、教育的な色彩を帯びています。「神戸」（楠木正成）・「船上山」（名和長年）・❶「福井」（新田義貞）など、 南朝方に属した武士が取り上げられる一方、足利尊氏は取り上げられないなど、当時の南朝を正統とする見方がうかがえます。

❶ 藤島神社と新田義貞

「少女思ひ出すごろく」　1913年（大正２）　坪田仁兵衛家文書（当館寄託）　C0005-01225

❷「球あそび」

❸「昔の友」

『少女世界』新年号付録。ふりだしの「お人形」からあがりの「大正の春」まで、上流階級に育った令嬢の幼児期からの思い出を描いています。❷「球あそび」（テニス）、❸「昔の友」（ひな祭り）など、当時の上流階級の様子がうかがえます。

なお、 ７・８ページに掲載した３点の発案者「小波」は児童文学者の巌谷小波（いわやさざなみ）（1870-1933）です。多くの雑誌で主筆として活躍し、多数の童話を発表するとともに、民話の普及にも貢献しました。

❶ 安政の大獄

「開国五十年双六（すごろく）」 1908年（明治41） 坪田仁兵衛家文書（当館寄託）
C0005-01218

『少年世界』新年号付録。1853年（嘉永６）のペリー来航にはじまり、幕末の動乱を経て明治維新、そして日清･日露戦争を経て、わが国が近代国家として発展していった過程をたどっています。

途中には、上のように松平慶永･橋本左内らが処罰された❶「安政の大獄」も入っています。このマスは「戻り」となっていることから、このできごとによって、わが国が近代国家への歩みから一歩後退した、と認識していたことがうかがわれます。

## お知らせ

### ◆企画展関連行事

**平成21年12月6日（日） 11:00～、14:00～**
文書館職員による展示説明会

**平成22年1月9日（土） 11:00～、14:00～**
イベント「ふくいのゆるキャラとすごろく対決」

### ◆県史講座

**平成22年2月7日（日） 13:30～15:30**
「発掘から見た福井藩士の生活」
講師：河村　健史 氏（埋蔵文化財調査センター）
会場：福井県立図書館　多目的ホール

### ◆講演会

**平成22年2月21日（日） 13:30～15:30**
「松平春嶽と明治維新」
講師：佐々木　克（すぐる） 氏（奈良大学文学部教授）
会場：福井県立図書館　多目的ホール

※県史講座、講演会は申込み不要です。

### ご利用案内

- 開館時間…午前９時から午後５時まで
- 休 館 日…月曜日（休日は除く）
  休日の翌日（土、日、休日は除く）
  文書等点検期間（年間10日以内）
  年末年始（12月28日～ 1月4日）
  清掃整理日（12月以外の第4木曜日、休日の場合は翌日）

※フレンドリーバス（無料）をご利用ください。

## 福井県文書館

平成21年11月27日発行　　編集･発行／福井県文書館
〒918-8113 福井市下馬町51-11
電話（0776）33-8890　FAX（0776）33-8891
ホームページ　http://www.archives.pref.fukui.jp
E-mail　bunshokan@pref.fukui.lg.jp

09.11.11398